

妻が是非観たいというので探したら Netflix で『#ター(Tár)』(2022 年) が見つかり、視聴できた。監督はトッド・フィールド。ケイト・ブランシェットが主人公のリディア・ターを演じた。ヴェネツィア国際映画祭で女優賞を受賞。第 95 回アカデミー賞では 6 部門にノミネートされた。彼女は 2 年前より、役作りの一環としてドイツ語やピアノのレッスンに励むと共に、YouTube のオーケストラの演奏動画を見て指揮者の動きを研究したそう。

普段は主にジャズを聴いている私にはクラシックの映画は荷が重い気がしたが妻の勧めもあって観ることにした。劇中に出て来る # マーラーの交響曲第 5 番は YouTube でも聴いてみた (トランペットのソロで始まる)。

リディア・ターはベルリン・フィルハーモニー管弦楽団における女性初の首席指揮者であり、作曲家としても指揮者としても当代随一と評価されていた。レズビアンである事を公表して女性パートナーと暮らし、幼い養女にパパと呼ばせて思う通りの人生を謳歌している。しかし、気に食わない学生を吊し上げて退席させ、長年仕えて来た副指揮者を非情に切り捨てる等、恨みを買う行動も目立っていた。ここまで来ると観るのが辛くなってくる。

かつての教え子が自殺したと知らせを受ける。彼女はターに性的関係を強要され、悩んだ末に去って行った女性だった。ターは自分を裏切った女性が音楽業界で働けないように、非難するメールを各所に送っていた。また、弟子でかつ秘書の女性は副指揮者に抜擢されると信じてターに尽していたが、他の男性にその地位を奪われ、リディアを攻撃する側に回った。複数の若い女性に、仕事をチラつかせては性的関係を迫ったと記事にされ、元秘書によって証拠のメールも提出された。自殺した女性の両親から告発されてネットは炎上する。パートナーも養女と共に離れて行った。ターはコンサートの指揮から外される。当日に満員の観客の前で代役の指揮者を指揮台から引きずり降ろす。会場から連れ出されたターは、音楽業界から追放の身となる。しばらく身を隠した後に、フィリピンで指揮の仕事を得たが、それはクラシックの音楽会場の雰囲気とは程遠い、仮装したオタクたちが聴衆のゲーム音楽のコンサートだった。

音楽には秀でていても、人間としては問題だなというのが、率直な感想であったが、ネットで調べてみるとこのような女性指揮者は実在するものの、リディア・ターはその指揮者をモデルにしたわけではない全くの架空の人物であり、完全

なフィクションであったのだ。原作があり、カナダの自給自足のコロニーで育った女性作家ミリアム・トウズの同名小説だそう。

そのことを知ると、改めてケイト・ブランシェットの演技に唸られる。批評家からも絶賛されているようだ。『#ター』は名声によって増幅していく権力が持つ負の側面を見事に映し出すことができた。」という評価である。

3時間近い映画であるが、最初の1時間を耐えてドラマと思って観れば、十分に堪能できる内容である。